

## 64

## 永嘉医派について

誌上発表

水溜 亮一

日本鍼灸研究会

永嘉医派とは、南宋代、永嘉（現在の浙江省温州）において活躍した医家の学統を指す。この学統に対する認識は、清代の著名な考証学者孫詒讓の父である孫衣言が、同郷の医家王硯の著書『易簡方』に注目したことに端を発する。近年、劉時覚はその著『永嘉医派研究』（中医古籍出版社、2000年）において、永嘉医派を「『三因極一病證方論』を理論の基礎とし、『易簡方』を学術の中心とする」と定義するとともに、学派を構成する主な人物として、陳言、王硯、孫志寧、施発、盧祖常、王暉を挙げている。以下、各家の代表的著作を概観し、劉時覚の見解について検討する。

陳言は、永嘉医派の中心人物である王硯の師であることから、本学派の創始者といえる。主著『三因極一病證方論』（1174年成。以下『三因方』）は、人迎氣口（左右の関前一分）で、浮沈遲數虚実の六脈を診ることにより、病因を内外傷に弁別し、その診断に基づいた治療を行うことを主旨とする。

王硯の『易簡方』（12世紀後半成）は、常用する重要処方、『三因方』などから抄出して編集した医書である。首論である「生薬科三十品目性治」では30種の生薬における性味と主治が示され、次の「増損飲子治法三十首」では30種の処方の主治が説かれ、最後の「養生肆門薬治法」において10種の丸薬の主治が述べられている。ただ、医学理論や診断法には触れず、専ら常用する処方の主治を示すことに眼目が置かれていることから、実用に資することを目的とした簡便書であるといえる。

孫志寧は、陳言の門人で、『増修易簡方論』（12世紀後半成、別名『増品易簡方』『増損易簡方』『孫氏易簡方』）と『傷寒簡要』を著したが、いずれも現存しない。ただ、このうち『増修易簡方論』は、『易簡方糾謬』、『医方類聚』および『雑病広要』に佚文が収められており、書題からも知れる通り、『易簡方』に補遺を加え、その主旨を踏襲した医書であることがわかる。一方、『傷寒簡要』は『医方類聚』にその全文が収められている。

施発には、日本近世に繰り返し重刊された『察病指南』のほか、『続易簡方論』（1243年成）と『本草弁異』（佚亡）の著作がある。『続易簡方論』は、旧知の間柄でもあった王硯の『易簡方』に補遺を加えたものである。但し、『増修易簡方論』とは異なり、詳細な病證診断の必要性を説いていることを特徴とする。

盧祖常は、陳言の知己であり、門人でもあったとみられる。その著『易簡方糾謬』（12世紀後半成）は、前述の『続易簡方論』と同様、各処方の主治症における詳細な病證学的弁別が必須であることを主張して、『易簡方』の「簡便書」という方法自体を厳しく批判するものとなっている。

王暉は、他の医家との関係は未詳であるが、『続易簡方脈論』（1244年跋）という著作があり、1本の刊本（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）及び2本の抄本（台湾故宫博物院図書館と国立公文書館内閣文庫に所蔵）として伝存する。筆者は未見であるが、『経籍訪古志』に「所載係四診論説及證治方剂、而標以脈論、未審何解」とあることから、四診による病證解析の重要性を強調したものと思われる。

劉時覚が定義したように、永嘉医派とは「『易簡方』を学術の中心とする」学派であることは明らかである。しかし、当書に対する各医家の立場は一律ではなく、孫志寧のように補遺を加え踏襲するものもいれば、盧祖常のように厳しく批判するものも含まれている。施発を始めとする増補や批判の内容は、詳細な病證解析の必要性を説く点において共通し、脈状による病證分類も散見される。但し、陳言が創始した人迎氣口診による内外傷の弁別といった具体的方法は認められず、「『三因方』を理論の基礎とする」とは言い難いものがある。今後、各書を詳細に検討し、『三因方』の影響がどのようなものであったかを明確にしていきたい。